白州だより

2009 年 9 月 8 日
二十四節気　白露

発　行　　白州郷牧場
山梨県北社市白州町横手 2259
TEL : 0551-35-4520
FAX : 0551-35-2970

白州郷牧場からの秋のおたよりをお届けします！　http://www.hakusyu.jp/　info@hakusyu.jp

09 夏の学校の感想

2009.8. 椎名 盛男

100 名近い学校でしたが、事故もなく無事に終わりました。お盆も終わり、白州は急に涼しくなり、梅雨明け宣言もないまま、もう秋風が吹いています。野菜は凶作のまま、秋冬野菜の時期へ移行しつつあります。

私たちの学校は、設立以来、子供たちの「自然と農」へのかかわりをずっとテーマにしてきました。都会の、自然を排除する人工化は止まるところを知りません。子供たちは、自身が自然な存在であるが故に、早く大人になることをせっつかれ、人工都市の秩序に順応される日々を送らされています。今、老人世代の子供が、現代の子の環境をみれば震えあがるでしょう。だから、都会の子は、都市と自然を行ったり来たりすることが大事だと私たちは考えています。

ミニ東京はいらない

今年は、経験も教養も不足しているでしょうが、農場のメンバーが子供たちの世話と行動を共にする班を持ちました。それは、都会の中で文明に秩序化され、商品経済と消費にどっぷりとつかっている青年たちがボランティアで参加し、子供たちをみても、ミニ東京がここ白州の農村に移動してきただけであって意味はないのではないか、という考えからでした。都会の消費主義と商品経済の言語でない言葉を話す人たちとコミュニケートすることも子供たちにとっていい経験になると信じ、農場メンバーが前面に出る学校としました。都会では何もかも商品（時間）にしてしまい、友情や愛情までもが、商品化され等価交換の対象とされてしまいます。子供たちは幼い時から、そういう文明に放り出されて育ちます。

自然のなかで絵を描くプログラム

「農」の世界に触れる、ジャガイモ堀り

ですから、子供たちは自然な存在として、人間がつくったものではないものを、見て、触れる必要があります。白州の雄大な自然は、人間のつくったものではありません。

水田の向こうに畑があり、畑の向こうに村があり、村の後ろに森があり、そこを川が流れている風景は、商品でなく、等価交換の対象ではありません。それは、溶け込む世界であって、他者として発見され、共生するものでもありません。風もセミの声も小鳥たちのさえずりも商品ではありません。子供たちは、ここ白州の村落に来て、人工化できないもの、商品でないもの、等価交換できないものに否応なしに出会い、自然のシャワーリングを受けます。別な言葉で言えば、五感が磨かれます。

農の世界

今年は、例年になく子供たちが農の世界にいる時間が多くなりました。畑で働く、農場の青年たちにふれあうのはとても大切なことのように思います。都会にあっては、子供たちの将来の適正なモデルとなる、お兄さんお姉さんたちが不在です。皆、ブラブラとしています。日本では非製造業に従事する人が 80%に達し、子供たちの圧倒的多数は、親の働く姿すら見ていません。ヒトは

100 名近い学校でしたが、事故もなく無事に終わりました。お盆も終わり、白州は急に涼しくなり、梅雨明け宣言もないまま、もう秋風が吹いています。野菜は凶作のまま、秋冬野菜の時期へ移行しつつあります。

私たちの学校は、設立以来、子供たちの「自然と農」へのかかわりをずっとテーマにしてきました。都会の、自然を排除する人工化は止まるところを知りません。子供たちは、自身が自然な存在であるが故に、早く大人になることをせっつかれ、人工都市の秩序に順応される日々を送らされています。今、老人世代の子供が、現代の子の環境をみれば震えあがるでしょう。だから、都会の子は、都市と自然を行ったり来たりすることが大事だと私たちは考えています。

白州町在住の日比野さんによる昆虫講座

ミニ東京はいらない

今年は、経験も教養も不足しているでしょうが、農場のメンバーが子供たちの世話と行動を共にする班を持ちました。それは、都会の中で文明に秩序化され、商品経済と消費にどっぷりとつかっている青年たちがボランティアで参加し、子供たちをみても、ミニ東京がここ白州の農村に移動してきただけであって意味はないのではないか、という考えからでした。都会の消費主義と商品経済の言語でない言葉を話す人たちとコミュニケートすることも子供たちにとっていい経験になると信じ、農場メンバーが前面に出る学校としました。都会では何もかも商品（時間）にしてしまい、友情や愛情までもが、商品化され等価交換の対象とされてしまいます。子供たちは幼い時から、そういう文明に放り出されて育ちます。

ですから、子供たちは自然な存在として、人間がつくったものではないものを、見て、触れる必要があります。白州の雄大な自然は、人間のつくったものではありません。

水田の向こうに畑があり、畑の向こうに村があり、村の後ろに森があり、そこを川が流れている風景は、商品

益虫や害虫について、畑での生きもの調査

でなく、等価交換の対象ではありません。それは、溶け込む世界であって、他者として発見され、共生するものでもありません。風もセミの声も小鳥たちのさえずりも商品ではありません。子供たちは、ここ白州の村落に来て、人工化できないもの、商品でないもの、等価交換できないものに否応なしに出会い、自然のシャワーリングを受けます。別な言葉で言えば、五感が磨かれます。

農の世界

今年は、例年になく子供たちが農の世界にいる時間が多くなりました。畑で働く、農場の青年たちにふれあうのはとても大切なことのように思います。都会にあっては、子供たちの将来の適正なモデルとなる、お兄さんお姉さんたちが不在です。皆、ブラブラとしています。日本では非製造業に従事する人が 80%に達し、子供たち

大武川の堰堤で川遊びする子供たち

の圧倒的多数は、親の働く姿すら見ていません。ヒトは労働を通じて人間を手に入れる（人間になる）と言ったのは、先人の言葉ですが、現代の子はヒトの子に生まれ、人間になっていく過程すらみることができません。農場で働く青年たちを見ること、マネをして手足を動かしてみることも、学校にとっては大切なプログラムです。農作業に夢中で参加している子、飽きてしまい畑の生き物観察をしている子、木陰で涼しい風を受けている子、とバラバラになりますが、私たちは、これでいいのだと考

白州郷牧場の本棚から

「オレ様化する子どもたち」

（中公新書ラクレ）
諏訪 哲二（著）

本書の著者、諏訪哲二氏は、60年代中ごろから高校教師として奮闘してきた教育のプロである。諏訪氏の言葉には、いわゆる教育評論家といった遠目に子どもたちを眺めてきた人々の言葉とは違う、生々しさがある。子どもたちの突拍子もないふるまいや行動を理論的に説明することはやさしいことではない。特に日本の思想的な傾向として、子どもたちをあらゆる可能性をもった純粋無垢なものとして見たがる。子どもたちの問題点を言語化するまでの悪戦苦闘ぶりが、本書では随所に見られる。

諏訪氏が言うには、1980年代中ごろから子どもたちがガラリと変わってしまい、教育が成り立たなくなっているという。諏訪氏にそう実感させたのは、授業中におしゃべりをする生徒を注意した時のことだった。注意されたその生徒はものすごい剣幕で「しゃべってねえよ、オカマ！」と反撃してきたのだ。それだけではない。喫煙現場を教師に見つかり注意をうけた生徒は、そのタバコを揉み消しながら「吸ってねえよ！」と言い張る。カンニングペーパーを見つかった別の生徒は「見ていない」としらばっくれる。

80年代以前にも喫煙やシンナー遊びにふける不良生徒はいた。しかし、彼らは「悪いことをした」という自覚をもっていたし、その点で教師と諍いを起こすようなことはしなかった。諏訪氏を驚かせた新しい世代の生徒たちは、「悪いことをした」という事実そのものを否認するようになっていた。なぜ今の生徒たちはこのような態度をとるようになってしまったのか。諏訪氏は「この子たちは等価交換をしたがっているのではないか」という仮説をたてて、子どもたちのふるまいを分析する。

授業中に私語をする生徒、喫煙を見つかった生徒、カンニングがばれた生徒、彼らは全員、実は「悪いことをした」という事実はわかっているのである。しかしながら、学校側から下されるであろう「処分」と自分が認定している「マイナス性」とが「等価交換」とは思えない。それをなんとか「帳りあっている」状態にしたいがために、「処分」の軽減を狙った事実の揉み消しを図っているのだという。

ここで諏訪氏が問題にしているのは、私語や喫煙、カンニングといった行為が横行していることではない。それらは社会的にふさわしくない行為として注意、時には処罰されなければならない行為ではある。しかし教師が生徒たちに望んでいることは、そうした行為を「しない」ことではなく、「しなくなる」ことである。注意や処罰を含めたあらゆる教育活動は、教師にとって「贈与」として意識されている。注意や処罰という贈り物を通して生徒たちが社会に順応できるように自己変革をしてほしい、というのが教師の望みなのである。しかし、現代の子どもたちにはそれが、反省をする契機としてではなく「不快」としてしか感じられない。また、今の自分のあり方を反省したり、改めたりする必要性を感じないほどに幼児的な全能感で満たされてしまっている。だから、教師側からの一方的な「処分」（贈り物）をそのまま受け取るわけには行かない。そこで自分が納得できる水準まで無理やりにでもその「処分」を軽減させて、教師も生徒も両方が納得のいく「等価交換」の関係にしたがる。つまり、「教えられる」・「与えられる」という受身の立場を放棄して、教師と対等な立場をとろうとするのだ。

なぜ、子どもたちは教師と対等な立場にたち、等価交換的な取引をできると思い込むようになってしまったのか。そのような全能感はどこからくるのか。諏訪氏は、「学校が『近代』を教えようとして『生活主体』や『労働主体』としての自立を説く前に、すでに子どもたちは立派な『消費主体』としての自己を確立している」と推理する。わかりにくいかもしれない。

昔の子どもたちは、大人たちが担っている庭掃除や皿洗いといった家事労働をお手伝いすることから、社会生活にはいっていった。そうした仕事を少しずつこなしていくことから、社会から承認される一人前の大人への成長ははじまってきた。しかし、現代では家事労働の負担が大幅に軽減され、家事の担い手としての子どもは必要ではなくなってきている。では、現代の

子どもたちが一番初めにする社会経験とは何なのか。お金と商品を等価交換すること、つまり「お買い物」である。

諏訪氏は 80 年代から社会全体が「消費社会期」に入ったと見た。そこでは生活の隅から隅までお金が入り込んでいる。お金さえ持っていれば、老若男女問わず、誰でも平等に商品を手に入れることができる。市場では子どもだからといって不当な扱いを受けることはない（お金さえもっていれば）。学校での教育を待たずに、子どもたちは「お買い物」の経験を通じて、一人前の大人になったという確信（幼児的全能感）を持つようになったのでは、と諏訪氏は分析する。

教師と生徒が対等になってしまえば、生徒が何を学ぶか取捨選択するということになる。しかし、それでは教育は破綻する。教育の目標は子どもたちの認識や価値観を大人（社会）のものと一致させることである。しかし、それはまだ子どもたちには「未知」なものなのだから、自主的に学べるものではない。大人から贈られる教育を通して、子どもは今ある自分を壊し、作り直していく。それを繰り返していくことでしか、子どもたちを社会的に自立した個人へと成長させることは難しいのである。

ここまでかなり乱暴に要約してしまった。書き足りないところも多々あるので、興味のある方はぜひ本書を手にとってもらいたい。子どもをもつ親御さんや教育関係者だけでなく、私のような「オレ様化」世代の方々にもお勧めである。

ちなみに今年の「きらら夏の学校」では私も小学校五年生の班のリーダーとなり、ささやかな教育活動に従事した。とはいえ、牧場の日常業務はこなしていかなければならないから、何をするにも「急げ！急げ！！」と急かしていただけのような気がする。子どもたちが野菜の収穫に飽きて遊びまわりはじめると、一緒に働くようにうながす。すると彼らも集まってくるのだが、またすぐ飽きる。今度は大声で怒鳴る。でもまた……。そんなことを繰り返していると、こちらもくたびれてくる。最終的には子どもたちをほったらかしにして農作業に専念することになる。かなりいい加減な教育だと思う。でも、昔の里山の風景もこんな感じだったのかなぁ、と勝手に思っている。

（**読者：**牧場スタッフ　**内藤 光**）

卵かけご飯のお店「おっぽに亭こっこ」、八ヶ岳アウトレットに OPEN ！

2009.9. **秋山 澄兄**

「おっぽに亭こっこ」の 2 号店が、白州の隣町、小淵沢町にある「リゾートアウトレット八ヶ岳」にオープンしました。

アウトレット八ヶ岳は北杜市内でも多くの人達が訪れる観光スポットのひとつです。卵かけごはんはもちろんのこと、外に張り出したテントで有機野菜の販売もやっています。本店と違い、来ている人達の目的は他の店舗だったり、人それぞれですから難しい面もありました。

今は少しずつですが、「おっぽに亭こっこ」を目的のひとつとして来てくれるお客さんも増えてきました。地元白州以外の場所で、どこまで健闘できるか、楽しみです。

「おっぽに亭こっこ」ホームページ
http://www.hakusyu.jp/opponi/
「白州郷牧場」ブログ
http://blogs.yahoo.co.jp/nnhdn247/